



13 特定非営利活動法人 くらし協同館なかよし



サロンのテーマ・目的

「ふれあい」「生きがい」「支えあい」をテーマに、高齢になってもいつまでも健康で過ごすために支援する人も利用する人も、お互いに喜びや生きがいを得られるよう、住民主体のボランティア活動で安心して暮らせるまちづくり、みんなのたまり場をめざしています。

開設年月日 平成17年10月21日
 開催拠点 くらし協同館なかよし
 連絡先 TEL : 029-273-8388
 FAX : 029-274-5127
 URL : <http://www.npo-nakayoshi.org/>
 代表者 塚越 教子

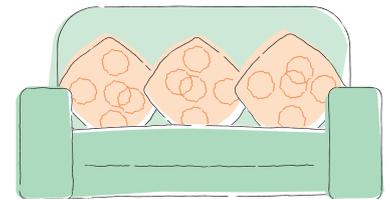
1回の参加人数 平均165人
 1回運営スタッフ数 平均17人
 利用料(参加費) 平均450円
 年間予算額 23,800,000円
 (平成20年度実績)(内訳) 助成金 100,000円
 自主財源 700,000円
 利用料(参加費) 23,000,000円

活動の概要

- 高齢者や障がい者の健康維持と介護予防，食生活自立支援，健康講座，健康体操などの開催。
- ふれあいとくつろぎ，食事と喫茶のコミュニティサロン，ふれあい食事会，趣味の教室やサークル活動の促進。若いお母さん方の子育てサポート，子育てサロンの開催や生活サポート事業。
- 手工芸品の展示発表の場。市内外福祉作業所製品の展示販売。市民交流市の開催。
- 地域産業支援，地産地消，農業体験や産地交流。

身近な人材や施設など地域の社会資源の活用

- (ハード面) 地域内の閉店した生協店舗跡の活用。
- (ソフト面) 地域の人材(中高年者)の発掘と活用によるボランティア活動(実働会員約80名)。地域内在住講師の発掘による趣味教室開催(28グループ)。地域の生産物，農業者，中小企業等との連携・交流。



サロンの特徴

- 県シルバーリハビリ体操指導士会の協力による健康体操教室。
- 誰でも(特に高齢者，障がい者，幼児を抱える母親たち)自由に利用できる「ゆっくりコーナー」の設置。
- 毎日色々な趣味活動が行われている。
- 全世代が楽しめる行事や祭り，講習会など年間約60回開催。

毎日，みんなのたまり場です。





サロン実施にあたって苦労したこと

人集め

- NPOの活動や運営内容等を地域住民によく理解して貰うため隔週発行によるニュース（2～3千枚）を戸別ポスティングするほか、タウン誌を活用した催事の案内。
- 地元2自治会の理解と協力のもと、随時開催行事等のお知らせは自治会回覧で周知。
- 運営スタッフの募集はニュースや来館する利用者へ呼びかけています。
- 受益者（利用者が）広範囲のため、イベントに際し駐車場不足で、団地近くの空き地借用による臨時駐車場開設。

活動拠点

- 生協店舗跡を生協パルシステム茨城から借用しています。
- 催事、総会等、多人数が集まる場合は、地元自治会の集会所を借用しています（自治会の法人会員となっている）。

財源

- 正会員及び賛助会員の拡大。
- 委託販売方式による手数料収入。
- 施設の維持・管理のための利用者からの参加料の徴収。
- 子育てサロンについては共同募金会配分金による備品調達。
- 食育活動では、パルシステムレインボー基金の助成金による備品調達。
- 高齢者サロンについては、市高齢者サロン補助事業の適用を受け備品調達。



サロン開催の効果

- 高齢化が進む団地で、地域に活気を取り戻すことができました。サロン活動に参加するボランティアも、利用する人も、生きがいと元気が得られると喜ばれています。
- 高齢者の見守り活動のなかで、認知症早期発見と民生委員や介護事業者との連携を密にし、適切な対処ができました。
- 館内でのふれあいを通じ、子育て中の若い母親たちと地域の高齢者との接点ができました。

サロン開催の課題、今後のサロン活動への想い

高齢化の進行は避けられない。単に館内活動にとどまらず、家事支援や生活面での困り事を手助けできる生活サポート活動の拡充をはかっていきたい。

また、高齢者が集まりやすくするための手段として、お知らせの方法や送迎の課題を解決したい。



委員からのプレゼント

一人暮らしが増え、近所の付き合いが希薄になるなか、「暮らし協同館なかよし」は生活の基本である「食」を中心としたお店を通じ、人々の新たなつながりを編み上げていました。

歩いて買い物ができるお店は高齢の方に便利だけでなく、気軽にお茶や食事をしながら人となかよしになる場（サロン）でもありました。また、健康や体操などを学ぶこと、子育て中のお母さんが安心して幼児と食事や買い物をする、放課後の子どもが立ち寄ることなど、地域みんなの居場所になっていました。

こうした世代を超えた人々が出会い、心を合わせてよりよい暮らしを築いていくための取り組みは、福祉のまちづくりそのものです。手と手をつなぐとりくみが、さらに広がっていくと確信しています。

（池田 幸也委員）